## 【表現学関連分野の研究動向】 認知言語学

野田 大志

◆本稿は、2016~17年の認知言語学的 研究の中で、表現学の観点から意義があ ると思われる4点を取り上げる。◆①野 呂健一(2016)『現代日本語の反復構文― 構文文法と類像性の観点から―』くろし お出版:同書は、「Nの中のN」、「VにV」 等、約20の反復構文について、豊富な実 例に基づいて詳細な意味分析を行ってい る。個々の構文の精度の高い意味記述、 構文間の相互関係の分析を含む反復構文 の体系化の試みをはじめ、現代日本語(複 合辞)の意味・文法研究に対する同書の 記述的貢献は大きい。加えて、認知言語 学の諸概念の理論的意義、有効性を強く 裏付ける記述的研究とも言えよう。◆② 大神雄一郎 (2017) 「「近づいてくるクリ スマス | と「やってくるクリスマス | : 時 間メタファーにおける"接近"の表現と "来訪"の表現について」『日本認知言語 学会論文集』第17巻:同論文は、日本語 時空間メタファーの成立基盤に関して、 「Xが近づく」等の《眺望描写型の時間メ タファー》、「Xに近づく」等の《主体移 動型の時間メタファー》、「Xがやってく る」等の《客人来訪型の時間メタファー》 という3分類を提案する。関連する諸研 究への十分な検討を行った上で、時空間 メタファー研究の新たな方向性を見出 している。◆③瀬戸賢一(2017)「メトニ ミー研究を展望する「『認知言語学研究』 第2巻:同論文はまず、メトニミーをめ ぐる欧米での研究史を概観する。また日 本での佐藤信夫氏を端緒とするメトニ

ミー研究の伝統と現状も概観する。瀬戸 氏は、シネクドキーをメトニミーの一種 と見做す伝統的な見方の本質的な問題 点を整理、検討し、改めて両者の峻別の 妥当性を示す。そして定義の問題を、言 語の仕組の解明に大きく貢献しうる重 要な判断基準と位置付け、「メトニミー とは、ひとつの場の中で、認知的に際立 ちの高いA(もの)でもって、それと隣接 関係にあると想定されるB(もの)を指示 するスピーディーな思考=表現法であ る。」と規定する。メトニミー研究の来し 方行く末を考える上で欠かせない論考で あろう。◆④西村義樹他編訳(2017)『メ ンタル・コーパス―母語話者の頭の中に は何があるのか―』くろしお出版:John R.Taylor (2012) The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mindの翻訳である。人間の言語知識を コーパスに見立て、ある言語を記述する にはその言語を構成する諸単位(音、単 語、コロケーション、構文等)についての 大量の個別情報を取り込む必要があると いう見解を、豊富な言語事実や実験結果 に基づいて多角的に検証し展開する。同 書は今後、堅実かつ妥当性の高い認知的 アプローチを推進する上での重要な指針 となろう。なお全ての実例の丁寧な和訳、 豊富な訳注、詳細な解題により、原著の 意義や魅力に真に迫れる訳書となってい ることも特筆すべき点である。◆以上4 点は、考察対象や分析手法は異なるもの の、いずれも言語記号の組み合わせによ り創発される様々な表現効果(修辞効果) への実証的な探究に重要な示唆を与える ものである。

(愛知学院大学)